

氏名（本籍）	アダム ジェームス ブース（イギリス）		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第204号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位論文等題目	〈作品〉「永遠の春」の連作、「吉兆と疑惑」の連作、「プロメテウス歓迎」の連作 〈論文〉雲から降りる；異文化での美術解釈とアダム・ブース作品の題材意義		

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授	(美術学部)	齋藤典彦
(論文第1副査)	〃	〃	(〃)	佐藤道信
(作品第1副査)	〃	教授	(〃)	関出
(副査)	〃	准教授	(〃)	植田一穂

(論文内容の要旨)

芸術家の社会的な位置付けは、人類学者のそれと非常に近いと考える。両者ともに自分自身を社会から離し、さまざまな角度から斬新な視点で、また外側から物事を観照しようとするからである。この論文は社会、宗教、歴史、また観念的な面も可能な限り考慮し、さまざまな視点から日本美術を研究したものである。これは、日本人の視点で日本美術を理解しようとするものと、日本人ではない者の観察と考察に基づいた研究である。そして文化と重なり合う美術が、どのように捉えられているかを考えたものである。

私が来日して初めて描いた日本画の作品は、京都の養源院で俵屋宗達が描いた象を基にしたものだった。西洋美術には白い象が存在しないので、宗達の絵を見た際、白い象は実在するのだろうか疑問に思った。しかし、象のように巨大なものが実在するのであれば、それに気付くはずであり、その質問自体不条理とも感じられた。宗達の描く象は実際にモデルが存在したのかもしれないが、日本人の想像力によるところが大きいのではないだろうか考える。そのことから、どのように事実と想像の領域を区別するのかと考えるようになった。

この論文では、日本美術に登場する白象のモチーフの意味と解釈を見出し、異文化間におけるモチーフの理解について考察することを目的とした。私には、美術は世界共通の言語であり、文化に区切られることなく理解されると思われたが、この研究によってモチーフの意味と解釈は、難解かつとても主観的なものであることがわかった。美術は、根本的なレベルにおいては世界共通であると考えられるが、深い理解は、文化や宗教上の背景や知識に関係する。

日本画の研究から、私の作品制作は大きな影響とひらめきを得た。またそれは、我々の世界の見方と想像力と表現方法の全てが、文化に限定されていることを理解する手助けとなった。他の文化にふれ合うことによって表現方法は広がり、想像力は限界を超え、新たな見解が広がりを持つ。そのために、芸術家達は歴史を通じて、新しい見識やインスピレーションや表現方法を見つけようと、外国の文化を求める。その過程で、異文化のイメージやモチーフを取り入れ、新しい意味と解釈が生まれたのである。

各章の概要

1章 知覚：我々の世界の捉え方

最初の章は、我々がどのように世界を捉えているのか、また文化によって私達の眼にするものが、ど

のように構成されているかについて掘り下げていく。それは、眼で世界をどのように捉えるか、また眼で見たものが、どのように脳で解釈されていくかについての説明から始めた。次に、それらがどのように環境によって影響されるかについて記した。

2章 象徴としての白象

俵屋宗達の白い象に私が魅了された理由を説明した。この章は、日本人にとって象が何を象徴するのかを理解するために、白い象が描かれている作品について、どのように歴史的に象の描写が変化したのかを記した。さらに、芸術家達が現実に見たことがない題材をどのように表現するのかにも触れた。

3章 宗教と美術

異なった宗教での芸術の役割について述べ、どのように芸術が宗教を補助するか、またどのように宗教の考えが芸術のイコノグラフィを作ったかについて記した。

4章 神話と民族学

芸術がどのように神話と民族学に関連しているかを記した。私自身の作品（象、桃、鳥）に現れる題材に焦点をあわせ、それについて述べた。

5章 作品について

最終章は、1章から4章までに述べたことを参考に、私の作品の進化とアイデアについて述べた。自身の作品において何を向上させようとしているか、そして私とその変化をどのように受け止めているか、芸術的な影響、構成、技術的な考慮について記した。